NOTES①

小学生の親の子育てや学校教育に対する意識

研究開発室　的場 康子

ー要旨ー

① 全国の小学生の子どもを持つ親を対象に、小学生の生活状況、並びに、子育てや学校教育に対する意識を明らかにするためにアンケート調査を実施した。

② 小学校教育で身につけてほしい能力として、多くの親が、「基礎学力」とともに、「周りの人との人間関係づくり」に大きな期待を寄せている。

③ 子どもをめぐる生活環境については、地域が安全でなくなっているため、子どもの外出や外遊びに不安を感じている親が多い。外遊びができないと、運動能力の発達にも影響を及ぼす。これを補うために、運動能力を身につける場として、小学校教育に期待を寄せる人も多い。

④ 「人間関係づくり」にしても、「運動能力」にしても、近年の社会環境の変化に学校教育が柔軟に対応できるように期待したいが、同時に、親も含め、地域社会の様々な立場の大人たちが協力して、子どもが安心して過ごし、遊ぶことができる環境を再構築することも必要である。

1. はじめに

今、わが国では国を挙げて少子化対策に取り組んでいる。その内容は、出生率上昇のための取り組みから、すでに生まれている子どもたちの育成に関することまで、実に多岐に及ぶ壮大なプロジェクトである。

例えば、「再チャレンジ可能な仕組みの構築（中間取りまとめ）」（2006年５月　再チャレンジ推進会議）、「新しい少子化対策について」（06年６月　少子化社会対策会議決定）、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（06年７月　閣議決定）など、少子化対策にかかわる政府の方針が次々と発表されている。

このような中、本稿では、少子化対策の中でも、「すでに生まれている子どもたち」に目を向け、その健やかな育ちのための課題を考える。なお、「子ども」といっても、発達段階によってその対応は様々である。そのため、本稿では、次世代育成に重要な役割を担う「学校教育」も視野に入れるために「小学生」を対象とする。具体的には、小学生を持つ保護者に対するアンケート調査によって、子どもの生活状況や子育て意識、さらに学校教育への期待や満足度など、明らかとなったことを紹介し、子どもの健やかな育ちに寄与する社会環境整備のあり方を考察したい。

2. アンケート調査結果

(1)調査概要

小学生の子どもを持つ保護者の子育てや学校教育に対する意識などを明らかにし、子どもの健全育成にとって必要な環境整備を考えるために、アンケート調査を実施した。調査の実施概要は、図表１の通りである。

図表1　アンケート調査の実施概要

調査時期	2006年12月
調査対象	全国の小学生の子どもを持つ保護者（当研究所生活調査モニターより抽出）
調査方法	郵送調査法
サンプル数	配布数：664名　　有効回収数：612名（有効回収率：92.2%）

(2)調査対象者の基本属性

本調査の回答者は小学生を持つ家庭の保護者（図表２）であるが、実際の質問は、その家庭の「小学生」(小学生が複数いる家庭については「学年が最も低い子ども」)に対する教育観や生活状況をたずねている。

本調査で対象とした「小学生」について、性・学年別にみたものが図表３である。

なお、母親の就業状況をみると、専業主婦である割合が44.3%、パート・アルバイトが42.0%、会社員・公務員が8.2%、自営・自由業が4.1%である（図表省略)。

図表2　回答者の属性(性・年齢別)

		全体	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	無回答
全体	(人)	612	5	280	298	28	1
	(%)	100.0	0.8	45.8	48.7	4.6	0.2
男性	(人)	161	0	41	101	19	0
	(%)	100.0	0.0	25.5	62.7	11.8	0.0
女性	(人)	450	5	239	196	9	1
	(%)	100.0	1.1	53.2	43.7	2.0	0.0
無回答	(人)	1	0	0	1	0	0
	(%)	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0

図表3　小学生の属性(性・学年別)

		全体	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	無回答
全体	(人)	612	110	120	107	105	71	89	10
	(%)	100.0	18.0	19.6	17.5	17.2	11.6	14.5	1.6
男児	(人)	297	45	61	51	56	36	46	2
	(%)	100.0	15.2	20.5	17.2	18.9	12.1	15.5	0.7
女児	(人)	308	65	59	56	49	35	43	1
	(%)	100.0	21.1	19.2	18.2	15.9	11.4	14.0	0.3
無回答	(人)	7	0	0	0	0	0	0	7
	(%)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

(3)子どもの生活状況と子育て観

1)子どもの生活状況

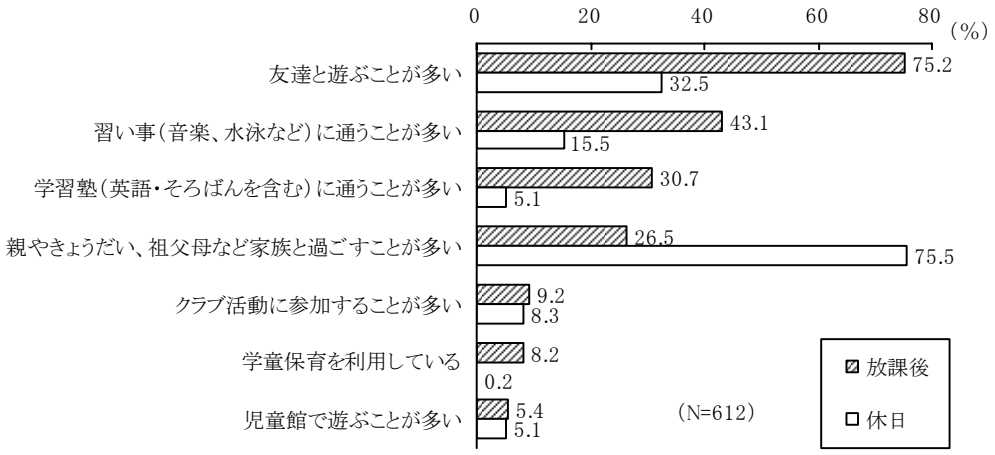
a)放課後と休日の過ごし方

子どもの普段の生活状況について、放課後と休日それぞれの様子をたずねたところ、放課後は、友達と遊んでいる割合が高いものの、習い事や学習塾に通う子どもも少なくない（図表４）。一方、地域の子どもに安全な遊び場を提供している「児童館」の利用割合は極めて低いという結果であった。また、回答者の家庭では、母親がフルタイムで働いている割合が低いことを反映して、「学童保育」の利用割合も低い。

休日は、「親やきょうだい、祖父母など家族と過ごすことが多い」（以下、「家族と過ごす」）への回答割合が75.5％と高い。

ただし、子どもの学年によって過ごし方は、少しずつ異なることが示されている。「家族と過ごす」割合は、放課後、休日ともに、学年が上がるにつれて低くなる(図表省略)。反対に、放課後の「クラブ活動」参加割合、休日の「友達と遊ぶ」割合が、学年が上がるにつれて高くなる。「学習塾」に通う割合も、放課後、休日ともに、学年が上がるにつれて高くなる。

図表4　放課後と休日の過ごし方＜複数回答＞

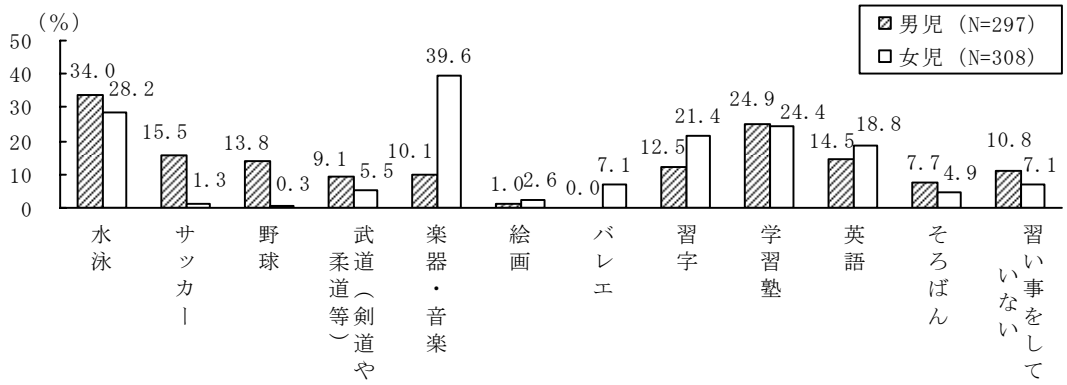


b)習い事

また、習い事やクラブ活動などを行っているかどうかをたずねたところ、実際になんらかの習い事をしていると回答した人は、全体の90.0％であった（図表省略)。

具体的な内容については、男女によって異なり、男児は「水泳」(34.0％)、女児は「楽器・音楽」(39.6％）が第１位であった（図表５)。

図表5　小学生の習い事＜複数回答＞

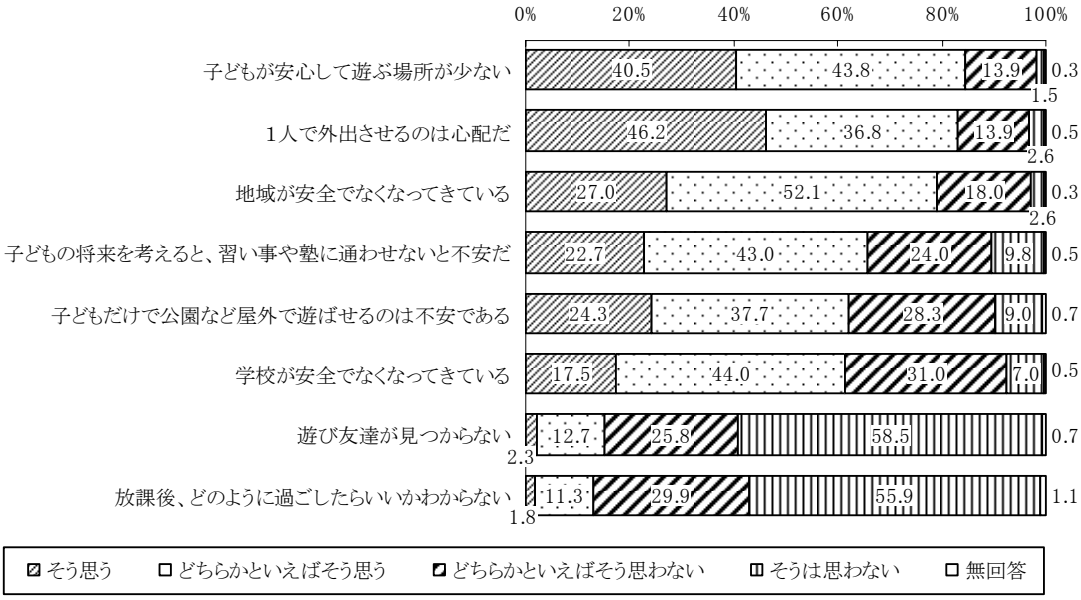


2）子どもをめぐる生活環境への不安感

子どもをめぐる生活環境の中から、遊び場などの安全面、教育面、友達関係などについての不安感をたずねた結果、安全面での不安が高いことが示された（図表６）。地域が安全でなくなっているため、子どもの外出や外遊びに不安を感じている親が多い。特にその傾向は、女児の親の方が高い（図表省略）。例えば、「子どもだけで公園など屋外で遊ばせるのは不安である」や「１人で外出させるのは心配だ」への肯定割合（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）は、女児の親の方が高い。

また、地域のみでなく、学校の安全面にも半数以上が不安を抱いている。学校も含めて、子どもの生活の場である地域社会の安全確保に向けての取り組みが急務である。

図表6　子どもをめぐる生活環境への不安感



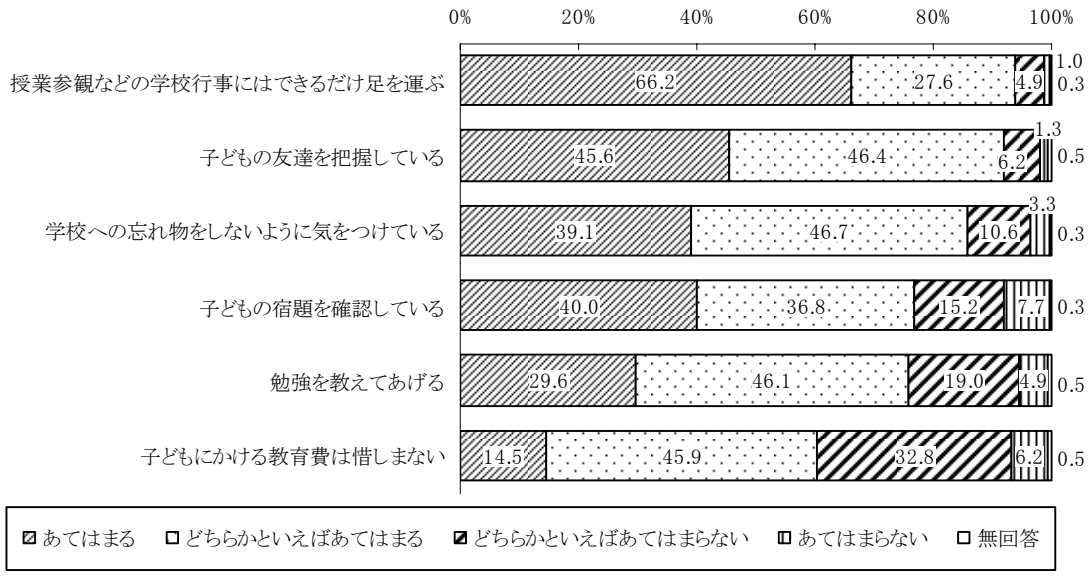
教育面については、「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安だ」への肯定割合は６割以上である。実際、前述のように、なんらかの習い事や学習塾に通っている割合は全体の９割にのぼり、すでに「将来に備えて」対応している人が多いことがうかがえる。

友達関係や放課後の過ごし方については、「遊び友達が見つからない」、「放課後、どのように過ごしたらいいかわからない」ともに肯定割合は２割以下と低い。遊ぶ場所についての不安は高いものの、友達関係や放課後の生活については、不安に感じている人は少ないようである。多くは、友達と遊んだり、習い事などに行って過ごしていることがうかがえる。

3）子どもに対するかかわり方

普段の生活の中で、子どもに対してどのようにかかわっているかをたずねた結果が、図表７である。「授業参観などの学校行事にはできるだけ足を運ぶ」(以下、「学校行事への参加」)や「子どもの友達を把握している」（以下、「友達の把握」）は、肯定割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計）が９割以上である。ほとんどの親は、子どもの学校での過ごし方や友達関係を理解しようとしているようだ。

図表7　子どもに対するかかわり方



次いで、「学校への忘れ物をしないように気をつけている」や「子どもの宿題を確認している」、「勉強を教えてあげる」への肯定割合も高く、多くの親が、子どもの学校生活をサポートしている様子がうかがえる。

なお、「学校行事への参加」や「友達の把握」については、学年による差異はみら

れなかったが、学校生活のサポートに関する上記３つの項目は、子どもの学年別にみると、学年が上がるにつれて肯定割合が低くなるという傾向がある。子どもの成長とともに、子どもへのサポートの程度を変えていく親が多いことが指摘できる。

(4)学校教育に対する考え方

1)小学校に対する期待

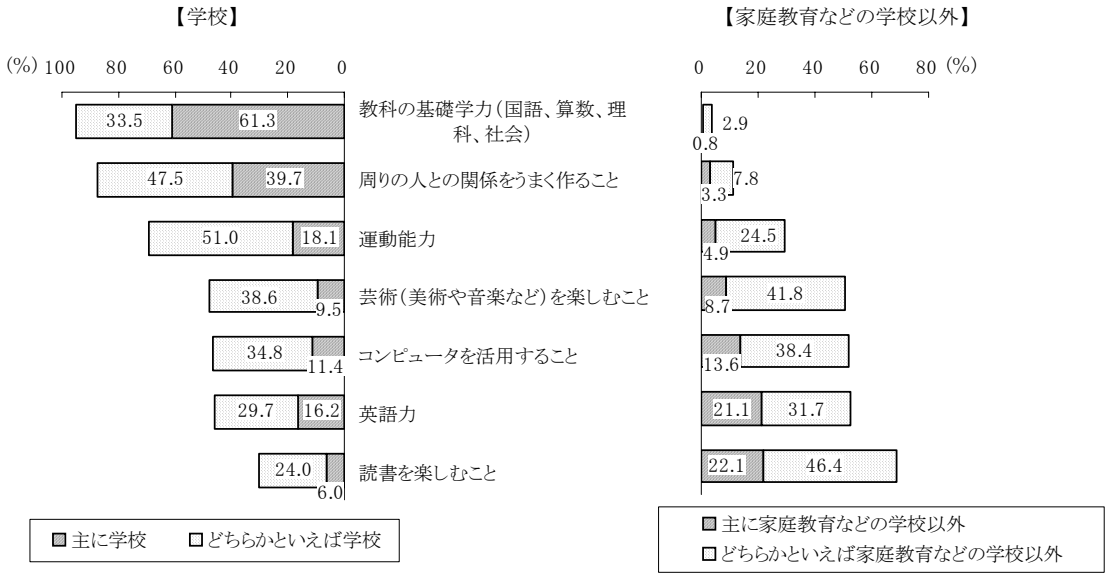
子どもに身につけて欲しいと思う能力や態度には、様々なものがあるが、特に学校教育の場では、どのような能力や態度を身につけて欲しいと思っているのであろうか。

図表８をみると、「教科の基礎学力（国語、算数、理科、社会)」、「周りの人との関係をうまく作ること」、「運動能力」については、「学校」（「主に学校」と「どちらかといえば学校」の合計）に期待するという回答割合が６割を超えている。

他方、「芸術（美術や音楽など）を楽しむこと」、「コンピュータを活用すること」、「英語力」、「読書を楽しむこと」については、「家庭教育などの学校以外」（「主に家庭教育などの学校以外」と「どちらかといえば家庭教育などの学校以外」の合計）に期待するという回答割合が５割以上となっている。

「運動能力」については、多少、意見が分かれているように見受けられるが、「教科の基礎学力」と「周りの人との関係をうまく作ること」は、圧倒的に学校教育に期待する割合が高い。「学力低下」や「いじめ」問題など、最近の各種報道も、少なからず影響しているように思われる。

図表8　能力や態度を身につけてほしい場



注：無回答を除く

2）学校教育に対する満足度

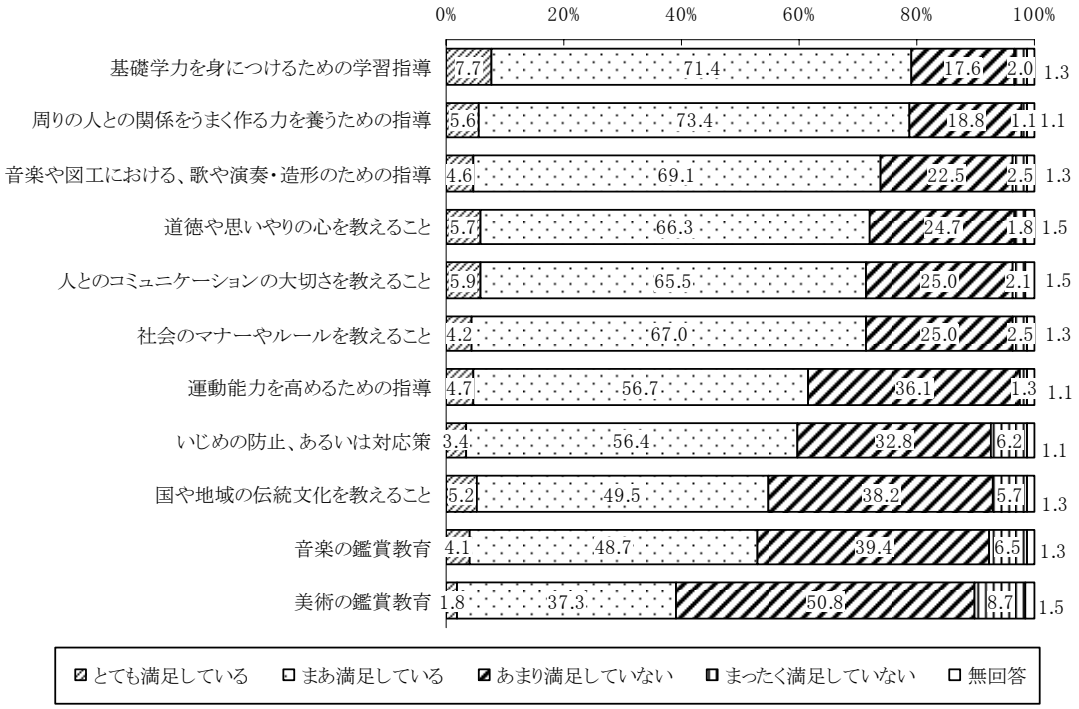
子どもが通う小学校に対する満足度をみると、「美術の鑑賞教育」以外、全ての項目に、半数以上が「満足している」（「とても満足している」と「まあ満足している」の合計）と回答しており、概ね学校教育に対して肯定的に受け止めていることがわかる（図表９）。特に、第１位の基礎学力と第２位の人間関係づくりについては、どちらも前項でみたように期待度も高く、学校教育での取り組みに期待通りの評価をしている親が多いことがうかがえる。

「美術の鑑賞教育」に次いで「音楽の鑑賞教育」も満足度が低かったが、同じ音楽や図工でも、「音楽や図工における、歌や演奏・造形のための指導」に対する満足度は高い。多くの親は、「実演」や「実技」に対する指導には満足しているが、「鑑賞教育」についてはその限りではないようだ。

また、「運動能力を高めるための指導」についてみると、約４割が「満足していない」という結果である。公園など、子どもの遊び場の減少や生活習慣の変化により、子どもの体力低下が社会問題となっている中、それを危惧している保護者が学校に強く期待している表れであると思われる。

さらに、「いじめの防止、あるいは対応策」についても、「満足していない」割合が約４割であり、「運動能力」に続いて、相対的に満足度が低い。最近の「いじめ」報道が影響しているものと思われるが、学校になんらかの対応を求める親の思いがうかがえる。

図表9　学校教育に対する満足度



3. まとめ

以上、小学生の子どもを持つ親の子育て意識や学校教育に対する意識を紹介した。最後に、調査結果より明らかになった、子どもの健全育成についての課題を示し、まとめとしたい。

まず、小学校教育に対して、「基礎学力」とともに、「周りの人との人間関係づくり」に大きな期待を寄せていることが明らかとなった。確かに、「人間関係づくり」は、「学力」とともに、子どもにとって、生きていくために必要かつ重要な能力である。しかしながら本来、「人間関係づくり」というものは、必ずしも学校教育でなくても、家庭や地域において様々な人たちとの触れあいの中で自然に体得できうるものでもある。それにもかかわらず、多くの親が学校教育の場に期待を寄せるのは、近年、きょうだい数や地域の子ども数の減少、あるいは通塾などにより、遊ぶ友達及び機会が少なくなり、学校以外で、人間関係の構築を学ぶ機会が減っていることを感じているからであろう。

また、多くの親が、地域が安全でなく、「子どもが安心して遊ぶ場所が少ない」ことを指摘している。公園で遊ぶことにも、子どもだけでは不安に思う親が多い。外遊びができないと、運動能力の発達にも影響を及ぼす。これを補うために、運動能力を身につける場として学校教育に期待を寄せる親も少なからずいるのではないか。

このようなことから、まずは、「人間関係づくり」にしても、「運動能力」にしても、近年の社会環境の変化に学校教育が柔軟に対応できるようになることが望ましい。しかしながら他方、学校教育のみに頼ることは本来の姿ではないだろう。学校教育における対応も重要ではあるが、同時に、親も含め、地域社会の様々な立場の大人たちが協力して、子どもが安心して過ごし、遊ぶことができる環境を再構築することが必要である[*1]。そのことにより、子どもたちは遊び場の確保のみでなく、地域の多様な人々との触れあいを経験し、人間関係を学ぶことも可能となる。

まさに、学校、地域社会、家庭が互いに協力し、次代を担う子どもの健全育成のために、その育ちの環境を整備することが求められている。そのために何ができるか、それぞれの立場で全ての大人たちが思いをめぐらすことも必要であろう。

（研究開発室　副主任研究員）

【注釈】

*1　実際に、「放課後子どもプラン」（06年５月　文部科学省と厚生労働省による事業連携）や「子ども安全・安心加速化プラン」（06年６月　犯罪対策閣僚会議・青少年育成推進本部合同会議了承）において、子どもが安心して安全に遊べる場所の確保のための取り組みや、地域の防犯活動が推進されつつある。